

ニュース
みやぎ生協組合員や
宮城県漁協と交流
大阪いずみ市民生協

大阪いずみ市民生協は、震災後、バスで被災地を訪れ、炊き出しや漁港での土のうづくりなどのボランティア活動を行なっています。昨年からは、より大阪らしい企画をと、「たこ焼き交流ボランティア」を福島県や宮城県で始めました。

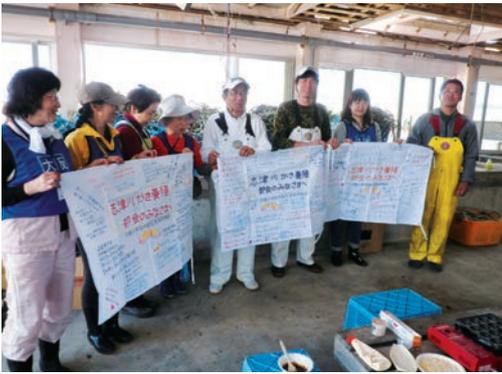
5月17日、18日には、組合員19人と職員2人が「ボランティアバス」で宮城県の石巻市、女川町、南三陸町を訪問しました。17日は、みやぎ生協のメンバー（組合員）と「たこ焼き交流」を行いました。この企画は、大阪いずみ市民生協が、「組合員同士の交流会を開きたい」とみやぎ生協に依頼し



焼き方を教えてもらったみやぎ生協の組合員。「家でまた焼き作っています」。

実現しました。「みやぎ生協のこころ委員さんも、さまざまな支援活動などで疲れていると伺い、ホッとできる機会をつくろうと思って企画しました」と大阪いずみ市民生協・組合員活動部部长（現、大阪府生協連・常勤理事）の中村夏美さんは話します。

また、18日は、南三陸町志津川を訪問。袖浜地区で、メカブ削ぎ作業の手伝いを行ないました。宮城県漁協志津川支所課長の菅原茂さんは、「カキ処理場もでき、2年でここまでこられるとは予想してませんでした。ご支援くださった皆さんのおかげです」と話し、カキ養殖部会会長の遠藤勝彦さんは、「旧知の間柄のように接してくださいます。いつも、何が必要ですかと心を寄せてくださり、ありがたく思いません」と感謝の言葉を伝えていました。



寄せ書きを贈る、大阪いずみ市民生協組合員。カキ処理場の完成で140人～150人の雇用の場ができたそうだ。

ニュース
「土壌スクリーニング・プロジェクト」
ボランティアに新コース
福島県生協連



レクチャーを行なう、福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター 特任研究員の朴 相賢さん（左から2人目）。

るため、全国の生協にボランティアを呼び掛けていますが、これまでは、レクチャーと実測を含め、4日連続の参加が必須だったため、「より参加しやすいボランティアのコースをつくってほしい」との声が多数上がっていました。こうした声を受け、5月より、2日間の「ショートコース」、「リピーターコース」が新設されました。ショートコースに参加した、東京都生協連の荒井伸幸さんは、「ショートコースにも、福島県の農地の実態や課題を学ぶことができるレクチャーがあり、大変勉強になりました」と話します。

冬の間は、田んぼの測定が中心になわれていましたが、作付けの時期に入ったため、いったん田んぼの測定は終了し（県内の田んぼの35%が測定完了）、5月中旬からは果樹園を中心に進められています。



果樹園の放射性物質濃度測定の様子。

福島県生協連は、J・A新ふくしまや福島大学と共に、農地一枚ごとの放射性物質濃度を測定し、その結果を今後の生産計画に生かすための「土壌スクリーニングプロジェクト」を行なっています。5月27日には、このプロジェクトを含めた福島県生協連の取り組みに、消費者支援功労者表彰の最高賞である「内閣総理大臣表彰」が贈られました（詳細は31ページ）。「土壌スクリーニングプロジェクト」では、測定の可視化と、その速度を上げ

※ ボランティアの応募は、「土壌スクリーニングプロジェクト」ホームページにて。
「土壌スクリーニング」、または「どじょうスクー」でインターネット検索を。